



第 6 回 CENA 夏季学校を終えて

大橋正明

(CENA 夏季学校校長・聖心女子大学教授)

今年も恒例の夏季学校が、初めてインドネシアで、そのジョグジャカルタ市にあるイスラーム大学 (Univ. of Islam, Indonesia、以下 UII) の国際関係学科をホストに、7泊7日の日程で成功裏に開催され、無事終了したことを心から喜んでいます。

今回の夏季学校には、アジアの11か国から41人の学生・大学院生、そして11名の教職員が積極的に参加しただけでなく、聖公会大学校がインドネシアのUII周辺の農村で実施中のAIDCT(Alternative International Development Cooperation Team= もう一つの国際協力チーム) というプロジェクトのスタッフ4人とUIIの教職員が、献身的に支援してくれたために、大変充実した内容になりました。改めて、ジャティ先生を始めとしたUIIとAIDCTの皆さん、宿泊先として宿舎や食事、研修会場やリクレーション、夜の音楽大会まで用意してくれたケンバング・アルム観光村の皆さん、そして全ての参加者に篤く御礼申し上げます。

ここでCENAとその夏季学校について、簡単に振り返っておきましょう。

この発端は、元々「NGO大学院」というユニークな市民活動家向けの大学院を持っていた韓国・ソウル市にある聖公会大学校が、2007年にアジアのNGO活動家を対象にした、フルの奨学金付き修士コース“Master of Arts in Inter-Asia NGO Studies, 以下 MAINS) を開設したことです。同様に市民活動を通じた平和とアジアを指向する恵泉女学園大学は、それに積極的に協力していこうと考え、翌08年にこの二つの大学間で相互協力協定が結ばれました。

当初は MAINS の集中講義に恵泉が教員派遣をしていたのですが、2011年に MAINS と恵泉の大学院生と教員と一緒に学ぶ「冬季学校」がソウル市で開催され、その際に仲間を増やしていくための「アジア市民社会教育ネットワーク (Civil Society Education Network in Asia, CENA) の発足と、夏季学校の例年開催が決まりました。

その翌年2012年夏から15年まで4回のCENA夏季学校が、韓国で開催されました。第1回は農村部で、第2回は朝鮮半島を分断する38度線に接したDMZ(非武装ゾーン)にある平和村で、第3回は聖公会大学校のキャンパスで、そして第4回は韓神大学校がホストになってそのソウルキャンパスで実施されました。その過程で、同様な思考を持つ教員や学校、教育系組織が次第に集まってきました。現在では聖公会と恵泉に加えて、韓国では同様にリベラルで知られる韓神大学校、ジャーナリストが創設した台湾の世新大学、恵泉と関係が深かったタイの AMAN (Asia Muslim Action Network= アジアイスラーム教徒活動ネットワーク)、そして私の転勤先の聖心女子大学です。

韓国政治の保守化もあり韓国での開催継続が困難になったために、昨年(2019年)の第5回夏季学校は、タイ国の AMAN がホストを引き受けてくれ、バンコク市郊外にある AMAN の教育研究施設である国際平和学・開発学研究所 (International Institute of Peace and Development Studies、以下 IIPDS) のキャンパスで開催されました。この時には、エジプトを含むアジアの10カ国から全部で約50人が参加し、3泊4日の日程でした。ちなみに聖心と恵泉は、その後引き続きバンコク市内を中心

に開発協力の ODA と NGO の現場を訪問するスタディツアーを 2 泊 3 日で実施しました。

この第 5 回で新規参加したのは、早稲田大学の外国人留学生や日本の学生に向けた学生寮と社会教育や社会活動の場を提供する (公財) 早稲田奉仕園と、今回ホストであるインドネシア・イスラーム大学です。この段階で、CENA は 6 つの大学と 2 つの教育系 NGO というユニークなネットワークに成長しました。

第 6 回 CENA 夏季学校の特徴を、以下に数点挙げておきます。これらは単発で参加する学生・大学院生には、なかなか気が付きにくい点だと思います。

まずは、実際の会場です。開会式だけは UII のキャンパスでしたが、それ以外は村人たちが共同で作った観光村という村人が提供した質素な家屋で、村人の生活様式に極めて近いスタイルで寝泊まりし、食事をし、皆で教室で学び、村を流れる川やそのわきの広場で様々なリクレーションを楽しむことが出来ました。トイレで紙を使わない、使ってもそれを流さない、水浴は冷たい水を手桶で汲んで被る、日本の納豆に近いテンペを含んだ村人が作ってくれた現地の食事を毎回食べる、村人の奏でる音楽で踊りを楽しむ、エアコンのない部屋でみんなと雑魚寝する、と言ったことは貴重な経験だったはずです。

インドネシアの古都ジョクジャカルタで開催できたことも、大きな特徴です。観光が多すぎると言う声もありましたが、仏教遺跡のボロブドール、ヒンドゥー教遺跡のプランバナン、スルタン王宮等の見学やラーマヤナ劇鑑賞ができたことは、この古都が会場だったからこそです。歴史的に東南アジア一帯が、仏教、ヒンドゥー教、そしてイスラーム教というグローバル化に遭遇してきたことに、気が付く機会になれば幸いです。

資金的にはこれまでは参加団体と参加者の拠出、及び初期は韓国・光州市の 5・18 記念財団の助成で全てを賄ってきたのですが、今回は初めて複数のしかも大型の資金援助を、頂くことができました。韓国からは、政府の ODA 実施機関 KOICA と市民運動を後押しする美しき財団 (The Beautiful Foundation)、日本の仏教系の庭野平和財団、そしてホストを引き受けて下さった UII から、大きな資金援助がありました。この場で、諸団体に深く御礼申し上げます。

このために、参加者の負担が一人 150ドルとこれまでに最も低額になり、ジョグジャまでの少し高い旅費を補うだけでなく、ムハマディアのリーダーを講師に招くなど内容的にも充実したものになりました。特に日本からの参加者の事前と事後の会の開催やこの日本の三団体の合同報告書の作成は、庭野平和財団と早稲田奉仕園の支援のお陰です。

草の根の市民社会活動を通じて平和を志向する 8 団体のこのネットワークは、上に述べたように 6 年間に渡って多宗教・多文化のアジアの若者たちが集う場を提供してきました。しかし CENA には、恒常的組織も資金もありません。今回の参加者の誰かが指摘していたように、まさに「ゲリラ的」に行われています。そのために、教職員のジェンダーバランスが取れていない、プレゼン内容の事前配布などの事前準備が不十分、参加者を繋ぐ HP もない、と言った問題を抱えています。そうしたことを、ネットワークの仲間ですらどうか改善していくつもりです。ただ少し時間がかかることは、どうかご容赦ください。

最後に繰り返しになりますが、ジャティ先生を始めとした UII とその教職員の方々、AIDCT とケンバング・アルム観光村の皆様、ゲスト講師の皆さん、資金支援団体、そして参加者の皆さんに心より御礼を申し上げます。本当にありがとうございました！